誤　算

夏野　やすみ

other-world
(アザー・ワールド)

ある会社の誤算

　Ａ社は、リストラによって経費削減とともに従業員の質を高めようと、厳しい通達を社内に出した。
「大きなミスをした者はクビ」
　どの程度の失敗がリストラの対象になるのかはよくわからなかったが、社員たちも非正規社員たちも戦々恐々。不安と緊張のあまり、かえってミスをしてクビになる者が続出した。
　その一方で、他人の評判を落とすことによって自身の保身をはかろうと、同僚の些細な失敗を何倍にも拡大して上司に密告したり、悪口を広めようとする者も多かった。
　さらには、これを機会にライバルや嫌いな人間を排除しようとする者さえ現れた。
　そうすると、そういうギスギスした人間関係に堪えかねた者は、ストレスからミスを犯してクビになったり、自ら辞めていったり。
　いつしか、会社に残るのは、居丈高にまくし立てて他人にストレスをかけるのが得意な者や、根回しして他人の悪口を広めるのが得意な者ばかりになっていった。
　そういった口で世渡りしてきた者たちは、仕事ができると自負しており、周囲にもそう思われていたが、実際には往々にして地味な根気仕事は苦手。根気仕事を人にさせて、自分はそのアラを探し、「こんなミスをするなんて信じられないね」「結局、俺たち仕事のできる人間が補わなくちゃならないんだよな」などと触れ歩いていたが、いざ蹴落としたライバルの仕事を受け継いでみると、なかなかこなしきれない。
　だが、彼らがミスをしても、もはやクビにする余裕はＡ社にない。リストラのしすぎで人が半分以下に減ったのに、人を使い捨てにしているという悪評が広まって、求人に応じる者がめったにいないからだ。
　かくてＡ社は倒産した。

ある勝ち組の誤算

　孝夫の勤める会社は、ここ数年、業績があまり思わしくない。いずれリストラが行われるのではないかと、社員たちは不安な毎日だ。
　そんななか、勝ち組となるべく、孝夫は対策を考えた。
　発言力のある管理職に取り入り、ライバルの悪口をさりげなく吹き込んで、相対的に自分の立場を強くする。
　とくに不況でなくても、そういうことを考える勤め人は珍しくあるまい。ましてリストラの危機となれば、それを実行する者は好景気のときより多かろう。孝夫はそのうちのひとりに過ぎなかったともいえる。
　ただ、孝夫は、同じようなことを考えた他の者たちよりも幸運で、人間関係の要領もよかった。
　子どものころから、目上の人にかわいがられるようにふるまうのは大の得意。就職してからも、課長とウマがあってかわいがられており、酒や食事をともにする機会も多い。
　それだけに、飲み屋でさりげなく同僚の話題を出し、陰口と思われないようにうまく批判し、課長が同僚を過小評価するように根回しするのは、孝夫にはそれほど難しいことではなかった。
　ひとたび先入観を植えつけられると、相手がほんの少しでもそれにあてはまることをすれば、聞いたとおりだと納得してしまう。そんな先入観を、孝夫はさりげなく課長に植えつけていったのだ。
　その甲斐あって、同僚たちのある者は課長に頼りないと思われ、別の者はだらしないと思われ、また別の者は仕事が効率的ではないと思われた。
　もちろん、そんな根回しをしているなど、同僚たちには内緒だ。ばれれば、同僚たちがつるんで、自分を排除しようとするだろう。
　だから、同僚たちには、わざとらしいほど親しげにふるまう。それも孝夫は得意だった。
　やがてリストラがはじまると、孝夫の同僚たちは次々に退職を勧告され、職場を去っていった。
　社内のなかでもとくに孝夫の課は、リストラされた者が多かった。孝夫の根回しに乗せられた課長が、部下たちのほとんどは能力不足だと思いこみ、もっと優秀なスタッフと入れ替えたいと考えて、上部から求められた以上の人数をクビにしていったからだ。
「仕事のできない者ばかりでは業績を上げられない。これを機会にすぱっと入れ替えて、優秀な人間を採用したいんだ。一時的に人数は三分の一になってしまうが、君は仕事が早くて優秀だから、無能なやつの三人分ぐらい、難なくこなせるよな」
　課長にそう言われれば、孝夫としては否定しにくい。なんといっても、同僚たちの大半が自分の三分の一ぐらいしか仕事をしていないように、課長に吹き込んだのは孝夫自身なのだ。
　やりすぎたと後悔してももう遅い。
　かくて孝夫は、自分が退職に追い込んだ同僚たちの分まで仕事を背負い込み、連日、深夜まで残業する羽目になったのだった……。

誤算

http://p.booklog.jp/book/81440

著者 : other-world（夏野やすみ@アザー・ワールド）
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/other-world/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/81440

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/81440

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ